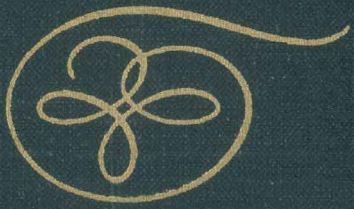

世界文学全集 28

チェーホフ

三人姉妹　桜の園
六号室　かわいい女他

神西清 中村白葉 訳

河出書房新社

世界文学全集 28 ェーホフ

©1962

編委員
阿部知二　伊藤　整
桑原武夫　手塚富雄
中島健蔵

昭和36年6月25日　初版発行
昭和38年1月25日　3版発行

定価　320円

訳　　者　神西　清
　　中村白葉
発 行 者　河出孝雄
印 刷 者　草刈親雄
装　　幀　原　弘

印　　刷：中央精版印刷株式会社
製　　本：中央精版印刷株式会社
本文用紙：日本紙業株式会社
同 納 入：東邦紙業株式会社
クロース：日本クロス株式会社
同 納 入：株式会社小島洋紙店

発 行 所　東京都千代田区神田小川町三の八　株式会社　河出書房新社
電話東京(291)3721～7
振替口座東京10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

三人姉妹……一
桜の園……七七
退屈な話……一三九
六号室……二〇三

短編集

嫁入り支度……二六二
接吻……二六八
ねむい……二九〇

グーセフ……二九六
中二階のある家……三〇九
かわいい女……三三〇
イオーヌィチ……三四五
犬を連れた奥さん……三六七
いいなずけ……三八六

年譜……（池田健太郎）四〇九
解説……（佐々木基一）四一九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

三人姉妹

―戯曲　四幕―

神西清訳

人物

アンドレイ（セルゲーエヴィチ・プローゾロフ）（この訳文では彼の年齢をオーリガとマーシャの間に想定してある）
ナターシャ（ナターリャ・イヴーノヴナ）そのいいなずけ、のちに妻。
オーリガ〔愛称オーリャ〕
マーシャ〔正式にはマリーヤ〕
イリーナ〔俗にはアリーナ〕
アンドレイの姉妹。
クルィギン（フョードル・イーリイチ）中学教師、マーシャの夫。
ヴェルシーニン（アレクサンドル・イグナーチエヴィチ）陸軍中佐、砲兵中隊長。
トゥーゼンバフ（ニコライ・リヴォーヴィチ）男爵、陸軍中尉。（この姓は先祖がドイツからの帰化人であることを示している。したがってトゥーゼンバッハとドイツよみにはしない）
ソリョーヌィ（ヴシーリイ・ヴシーリエヴィチ）陸軍二等大尉。
チェブトィキン（イヴン・ロマーノヴィチ）軍医。
フェドーチク（アレクセイ・パトローヴィチ）陸軍少尉。
ローデ（ヴラヂーミル・カールロヴィチ）陸軍少尉。（この姓はフランス系である）
フェラポント　県会の守衛、老人。
アンフィーサ　乳母、八十歳の老婆。

県庁のある町でのこと。

第一幕

プローゾロフの家。円柱のならんだ客間。柱の向こうに大広間が見える。ま昼。戸外は日ざかりで朗らかである。広間では朝食〔わが国の午食にあたる〕のテーブルをととのえている。

オーリガが、女学校女教師の青い制服をきて、立ちどまったり歩いたりしながら、生徒のノートを直しつづけている。マーシャは黒い服をつけ、帽子を膝にのせてすわり、小型な本を読んでいる。イリーナは白い服をきて、立って考えこんでいる。

オーリガ　お父さまはちょうど一年まえ、それもこの五月五日の、あなたの〝名の日〟（天使の日ともいう。当人の洗礼名と同じ名の聖人の命日。それをロシヤでは誕生日のように祝った）に亡くなったのね、イリーナ。あの日はひどい寒さで、雪がふっていた。わたしは、もうとても生きてられないような気がしたし、あなたは気が遠くなって、死んだみたいに臥ていたっけ。でも、こうして一年たってみると、わたしたち気楽にあの時のことが思いだせるし、あなたももう白い服をきて、晴ればれした顔をしているわ。（時計が十二を打つ）あの時も、やっぱり時計が鳴ったっけ。（間）覚えてるわ、お棺が送られて行くあいだ、軍楽隊がマーチをやったし、墓地じゃ弔銃を射ったわね。お父さまは将軍で、旅団長だったけれど、そのわりに会葬者は少なかった。もっとも、あの日は雨だったわ。ひどいみぞれだった。

イリーナ　そんなこと思いだして、どうするのよ！

列柱のむこう、広間のテーブルのあたりに、トゥーゼンバフ男爵、チェブトィキン、ソリョーヌィがあらわれる。

オーリガ　今日は暖かで、窓をあけっぱなしにしておいてもいいほどなのに、白樺はまだ芽を吹かない。お父さまが旅団長になって、わたしたちを連れてモスクワをお立ちになったのは、もう十一年前のことだけれど、今でもはっきり覚えている――五月のはじめ、ちょうど今ごろのモスクワは、もう花がみんな咲いて、ぽかぽかして、日ざしがあふれているわ。十一年たった今日でも、わたしあすこのことは、まるで昨日たっ

て来たように覚えているの。まあ、どうでしょう！けさ目がさめて、ぱっと一面に明るいのを見たら、春の来たのを見たら、とたんにうれしさがこみ上げてきて、生まれ故郷へ帰りたくてたまらなくなったわ。

チェブトィキン　ばかばかしい！

トゥーゼンバフ　もちろん、くだらん話です。

マーシャ　（本の上に考えこみながら、そっと歌を口笛で吹く）

オーリガ　口笛はやめて、マーシャ。どうしてそんなまねができるんだろう！（間）なにしろわたし、毎日学校へ行って、それから夕方までレッスンにまわるものだから、しょっちゅう頭痛はするし、考え方までが、すっかりばあさんじみてきたようだわ。そしてじっさい、学校に勤めだしてから四年のあいだに、毎日一滴また一滴と、力や若さが抜けてゆくような気がする。だんだん大きく強まってゆくのは、空想だけ……

イリーナ　モスクワへ行くといいね。この家を売って、きっぱりこの土地と手を切って、モスクワへ……

オーリガ　そうよ！　早くモスクワへねえ。

チェブトィキンとトゥーゼンバフ笑う。

イリーナ　兄さんは、きっと大学教授になるんだから、どうせここにいるつもりはないわ。ただ困るのはマーシャのこと、かわいそうに。

オーリガ　マーシャは毎年、夏休みじゅうモスクワへ来たらいいわ。

マーシャ　（そっと歌を口笛で吹く）

イリーナ　大丈夫みんな、うまくいってよ。（窓を見ながら）いいお天気ねえ、今日は。どうしてこう気持ちが晴ればれしてるのか、あたし自分でもわからない！　けさ、今日はあたしの〝名の日〟だったと、ひょいと思いだしたら、急にうれしくなって、まだお母さまが生きてらした、子供のころを思いだしたの。すると、あとからあとから、すばらしい考えがわいてきて、胸がどきどきしたわ。そりゃすばらしい考えばかり！

オーリガ　今日あんたは、いかにも晴れやかで、いつもよりずっときれいに見えるわ。マーシャもきれいよ。アンドレイだって、美男なのだけど、ただああ肥ってしまっちゃ形なしだわ。わたしときたら、このとおり老けて、すっかり痩せてしまった。きっとこれも、学校で娘たちにかんしゃくばかり起こすからよ。今日はお休みで、こうして家にいるので、頭痛もしないし、昨日より若くなったような気がする。わたしは二十八だけれど、ただねえ……。いいえ、不足をいうことはない、みんな神さまの御心だもの。でもね、わたしこ

んな気もするの――もしもお嫁にいって、いちんちじゅう家にいられたら、そのほうがもっといいようなね。（間）わたし、夫を大事にするわ、きっと。

トゥーゼンバフ　（ソリョーヌィに）そんなばかなことばかり言って、きみの話はもうたくさんですよ。（客間にはいりながら）そうそう、忘れていました。今日こちらへ、われわれの隊の新しい指揮官、ヴェルシーニンがごあいさつに出るはずです。（ピアノのそばにすわる）

オーリガ　まあ、そう！　たいそううれしいですわ。

イリーナ　そのかた、お年より？

トゥーゼンバフ　いや、大したことはありません。まあせいぜい四十か、四十五でしょう。（そっと弾く）見たところ、りっぱな人物です。すくなくも愚物じゃない――これは確かです。ただ、少々話ずきですがね。

イリーナ　きれいなかた？

トゥーゼンバフ　ええ、なかなかね。ただその、奥さんと、そのおっ母さんと、娘がふたりいますがね。おまけに二度目の細君なんです。あのひとはあいさつに行く先々で、かならず、細君に娘がふたりいると話すんですよ。こちらでもきっと言うでしょうよ。その奥さんというのは、なんだか少々低能みたいなひとでしてね、いまだに娘のように髪をおさげにして、へんに哲学じみた大きなことばかり並べて、しかもちょいちょい自殺を企てるんです。まあご主人につらあて、というところでしょうがね。ぼくならあんな女、とっくにごめんこうむってるところですが、あのひとはじっと我慢して、ただ愚痴をこぼすだけなんです。

ソリョーヌィ　（チェブトィキンとともに、広間から客間へはいって来ながら）片手だとぼくは一プード半（約二五キロ）ぐらいしか持ちあげられないが、両手だと五プード（約八二キロ）、いや六プード（約一〇〇キロ）だって持ちあげられる。だからぼくは、こう結論するんです――ふたりがかりの力は、ひとりの二倍じゃなくって、三倍も、いやもっと上だとね……

チェブトィキン　（歩きながら新聞を読む）抜け毛には……ええと、ナフタリン八グラムをアルコール半瓶（はんびん）に……溶解し、これを毎日もちいる……（手帳に書きこむ）書きとめておこう！（ソリョーヌィに）それでさ、いいかねきみ、瓶の口にコルクをはめて、それにガラス管をとおす。……それから、そのへんにあるごくありふれた明礬（みょうばん）を、ひとつまみとってね……

イリーナ　チェブトィキンさん。ねえ、チェブトィキンさんてば！

チェブトィキン　なんです、お嬢さん、わたしのかわいい？

イリーナ　教えてちょうだい、なんだってあたし、今日はこんなにうれしいんでしょう？　まるで帆をいっぱいに張って、海を走っているみたい――上にはひろびろした青空、大きなまっ白な鳥が飛んでいてね。なぜこうなんでしょう？　ねえ、なぜ？

チェブトィキン　（彼女の両手にキスしながら、やさしく）わたしの白鳥さん……

イリーナ　きょう目がさめて、起きて顔を洗ったら、急にあたし、この世の中のことがみんなはっきりしてきて、いかに生くべきかということが、わかったような気がしたの。ねえ、チェブトィキンさん、あたしすっかり知ってるわ。人間は努力しなければならない、だれだって額に汗して働かなければね。そこにこそ、人生の意義も目的も、その幸福も、そのよろこびや感激も、のこらずあるのよ。夜の明けるか明けないうちに起きだして、街で石をトンカチやる労働者や、羊飼いや、子供たちを教える先生や、鉄道の機関手になったら、さぞいいでしょうね。……ほんとに、人間であるとかないとかの問題じゃないわ、ただ働けさえすれば、いっそ牛にでも、ただの馬にでも、なったほうがましよ――お昼の十二時にのこのこ起きだして、ベッドのなかでコーヒーを飲んで、それからお召し替えに二時間もかかる……ああ、おっそろしい、そんな若い女になるよりはね！　暑い日に、水を飲みたくなることがあるでしょう。あたしが働きたくなったのも、それと同じよ。これからもしあたしが、朝早く起きてがんばらないようだったら、絶交してちょうだいね、チェブトィキンさん。

チェブトィキン　（やさしく）　しますよ、絶交しますよ……

オーリガ　父はわたしたちを、七時に起きるように、しつけてくれましたの。今でもイリーナは、七時に目だけはさますけど、それから少なくも九時までは、床のなかで何か考えているのよ。そのまじめな顔といったら！（笑う）

イリーナ　姉さんは、いつまでもあたしを子供と思ってるものだから、あたしがまじめな顔をすると変な気がするのよ。あたしだって、二十歳よ！

トゥーゼンバフ　勤労をなつかしむ気持ち、いやほんとに、ぼくはよくわかりますよ！　ぼくは生まれてこのかた、一度だって働いたことがない。あの寒い、ぐうたらなペテルブルグで、勤労とか心配とかいうものはついぞ知らない家庭に、ぽっと生まれたぼくですからね。忘れもしませんが、幼年学校から家へ帰ってくると、下男が長靴をぬがせてくれる、ぼくはだだのこねほうだいでしたが、そのぼくを母親は後生大事に奉っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

て、ほかの人がぼくにちがった扱いをすると、びっくり仰天する始末でした。ぼくが手足を動かさずにすむように、みんなでかばってくれたんです。もっとも、そのかばいだてが成功したかどうか、そこはどうやらあやしいもんですがね！　いまや時代は移って、われわれみなの上に、どえらいうねりが迫りつつあります。たくましい、はげしい嵐がもりあがって、もうすぐそこまで来ている。まもなくそれは、われわれの社会から、怠慢や、無関心や、勤労への色めがねや、くされきった倦怠だのを、一掃してくれるでしょう。ぼくは働きますよ。あと二十五年か三十年もしたら、人間はみんな働くようになりますよ。ひとりのこらずね！

チェブトィキン　わたしはごめんだな。

トゥーゼンバフ　あなたなんか、勘定にはいりません。

ソリョーヌィ　二十五年たったら、きみはもうこの世にはいないさ、ありがたいことにね。まあ二、三年もすれば、きみは卒中でぽっくり行ってしまうか、でなきゃこのぼくがかんしゃくをおこして、きみの額へ弾丸をぶちこむのがおちさ、なあきみ。（ポケットから香水瓶を出して、胸や手にふりかける）

チェブトィキン　（笑う）　いや、ほんとにわたしは、ついぞなんにもしたことがないな。大学を出たっきり、指一本うごかしたことがない。小さな本一冊、読みとおしたことはなく、読むのはもっぱら新聞だけでね……（ポケットから別の新聞をとり出す）そらね。……まあたとえば、ドブロリューボフ（ロシヤ十九世紀中葉の尖鋭な批評家）という男のいたことは、新聞で知っちゃいるが、じゃ何を書いたかというだんになると――知らないね。……どうぞご勝手に、というところさ。……（階下から床をコツコツいわせる音が聞こえる）そらね。……下でわたしを呼んでいる、だれか来たんだろう。すぐ来ます……ちょっとお待ちを……（ひげをしごきながら、あたふたと退場）

イリーナ　あれ、何か思わくがあるのよ。

トゥーゼンバフ　そう。まじめくさった顔をして出て行ったところを見ると、今あなたにプレゼントを持ってきますよ。

イリーナ　まあ、いやだわ！

オーリガ　まったく、やりきれないわ。あのひと、ばかなことばかりするんだもの。

マーシャ　〝入江のほとり、みどりなす樫の木ありて、こがねの鎖、その幹にかかりいて……。こがねの鎖、その幹にかかりいて……〟（プーシキンの叙事詩『ルスランとリュドミーラ』より。この叙事詩にもとづいて、グリンカのオペラがある）（立ちあがって、小声でうたう）

オーリガ　あなた今日、浮かない顔をしてるのね、マー

シャ。

マーシャ　（歌いながら帽子をかぶる）

オーリガ　どこへ行くの？

マーシャ　帰るの。

イリーナ　変ねえ……

トゥーゼンバフ　〝名の日〟のお祝いを逃げだすなんて！

マーシャ　いいのよ。……夕かた出直します。ごきげんよう、かわいいイリーナ……（イリーナにキスする）もう一ぺん――どうぞ元気で、仕合わせでね。むかし、お父さまがいらしたころは、〝名の日〟といえばかならず、将校連中が三十人、四十人とやって来て、にぎやかだったものだわ。それが今日は、せいぜいひとり半ぐらいで、静かなことといったら、まるで砂漠みたい。……わたし行くわ。……今日わたし、メランコロジー（ゆううつ症（メランホーリヤ）を、わざわざメルレフリコロジー（ユンジャと、でたらめな外来語めかした言葉で言っている。彼女自身の覚え違えというより、むしろ夫クルイギンの衒学癖への当てつけと解すべきであろう）で、くさくさするの。わたしの言うことなんか、気にしないでね。（泣き笑いしながら）あとで話しましょうね。じゃ、ちょっと失礼するわ、ね、イリーナ。わたし、どこかへ行って来るわ。

イリーナ　（不満そうに）まあ、なんていうひと、姉さんは……

オーリガ　（涙ぐんで）あなたの気持ち、わかるわ、マーシャ。

ソリョーヌィ　男が哲学を並べると、それがすなわちフィロソフィスティクス（これまた、でたらめな外来語である）――つまりその、こじつけになるわけだが、女がひとり、または、ふたりで哲学を並べだしたら、こりゃもうてっきり――あたしの指を引っぱってね、ということなのさ。

マーシャ　それ、どういうことなの？　おっそろしい野蛮人ね、あなたは！

ソリョーヌィ　なんでもないです。〝あやと言うまもなく、熊は襲いかかりたり〟さ。（間）

マーシャ　（オーリガに、腹だたしげに）泣かないで！

アンフィーサと、パイをささげたフェラポンドが登場。

アンフィーサ　こっちだよ、おまえさん。ずっとおはいり、おまえさんの足はきれいだからね。（イリーナに）市会の、プロトポーポフさまから……お祝いのお菓子でございますよ。

イリーナ　ありがとう。お礼を申しあげてね。（パイを受けとる）

フェラポント　へえ、なんですかね？

イリーナ　（声を高めて）お礼を申しあげて！

オーリガ　ぼあや、このひとにピローグ（肉入りのパイ）をあげて。フェラポント、向こうへ行って、ピローグを食べておくれ。

フェラポント　へえ、なんですかね？

アンフィーサ　さ、行こうよ、フェラポント。じいやさん、行こうよ。……（フェラポントとともに退場）

マーシャ　イワンの息子だか、薬罐の息子だか知らないけれど（わざと父称を言い違えている おかしみ）、あのプロトポーポフなんか、わたしきらいよ。あんなひと、招ぶことないわ。

イリーナ　あたし、招びはしないのに。

マーシャ　そんならけっこう。

チェブトィキン登場。そのあとから、銀のサモワールをささげた兵士。おどろきと不満のどよめき。

オーリガ　（両手で顔をおおう）　まあ、サモワール！困ってしまうわ！（広間のテーブルの方へ去る）

イリーナ　ほんとにチェブトィキンさん、なんてことなさるの！

トゥーゼンバフ　（笑う）　ほらね、ぼくの言ったとおりだ。

マーシャ　チェブトィキンさん、臆面のないかたねえ、あなたは！

チェブトィキン　かわいい、りっぱなお嬢さんがた。あなたがたは、わたしのただひとつの生きがいだ、この世で一ばん大事な人たちだ。わたしはまもなく六十になる。老いぼれで、ひとりぼっちで、吹けば飛ぶような老人です。……何か取柄があるとしたら、あなたがたをいとしいと思う、この心だけですよ。あなたがたがいなかったら、もうとっくにこの世におさらばしていたでしょうよ。……（イリーナに）わたしのかわいい嬢っちゃん、わたしはあなたが、オギャアと生まれた日から知ってますよ……両手でだっこしたものですよ……わたしは、亡くなったママが大好きでしたよ……

イリーナ　でも、どうしてそんな高いプレゼントを！

チェブトィキン　（涙ごえで、腹だたしく）　高いプレゼントですと。……ほんとに、あんたがたという人は！（従卒に）サモワールをあっちへ持っていけ。……（口まねする）高いプレゼント……（従卒がサモワールを広間へ運び去る）

アンフィーサ　（客間を通り抜けながら）嬢さんがた、知らない軍人さんが見えましたよ！　もう外套ぬいで、な、嬢さんがた、こっちへおいでですよ。アリーナ（イリーナの俗な呼び方）さんや、愛想よく、ていねいになさいましょ。……（出て行きながら）もうとに朝食の時刻なのにさ。……やれやれ……

トゥーゼンバフ　ヴェルシーニンですよ、きっと。

ヴェルシーニン登場。

トゥーゼンバフ　ヴェルシーニン中佐！

ヴェルシーニン　（マーシャとイリーナに）お目にかかれて仕合わせです、――ヴェルシーニンです。ようやくこちらへうかがえて、じつにじつにうれしく思います。大きくなられましたねえ！　まったくどうも！

イリーナ　どうぞお掛けになって。あたくしたちも、うれしくぞんじますわ。

ヴェルシーニン　（陽気に）いや、じつにうれしい、じつにうれしい！　だが、あなたがたは、三人姉妹でいらしたはずですな。たしか――お嬢さん三人だったと記憶します。お顔はもう覚えていませんが、お父さまのプローゾロフ大佐には、ちっちゃな女のお子さんが三人いらしたのを、はっきり記憶していますし、現にこの目で、しかと見ております。時のたつのは早いものだ！　いや、じつに、早いもんですなあ！

トゥーゼンバフ　ヴェルシーニン中佐は、モスクワから赴任されたのです。

イリーナ　モスクワから？　あなた、モスクワからいらしたんですの？

ヴェルシーニン　ええ、モスクワから。亡くなられたお父さまが、あちらで砲兵中隊長をしておられたころ、わたしは同じ旅団の将校でした。（マーシャに）そう言えば、あなたのお顔は少し覚えがあるようです。

マーシャ　でもわたしのほうでは――さっぱり！

イリーナ　オーリャ！　オーリャ！（広間へ向かって叫ぶ）オーリャ、いらっしゃいよ！

オーリガ、広間から客間へはいり来る。

イリーナ　ヴェルシーニン中佐、モスクワからおいでになったんですって。

ヴェルシーニン　ではあなたが、一ばん上のオーリガさんですね。……すると、あなたがマリーヤさん。……あなたがイリーナさん――一ばん末の……

オーリガ　モスクワからいらっしゃいましたの？

ヴェルシーニン　そうです。モスクワの学校を出て、モスクワで任官して、長らくあちらで勤務していましたが、とうとうご当地の隊を持つことになって――ごらんのとおり転任して来ました。わたしはあなたがたを、ほんとに記憶しているわけではなく、ただご姉妹三人とだけ覚えています。お父さまのことは記憶がはっきりしていて、こうして目をつぶると、さながら生ける者のようにまぶたに浮かびますよ。モスクワのお宅へは、ちょいちょいうかがったものでした。……

オーリガ　わたし、みなさん残らず覚えているような気でいましたのに、思いがけなく……

ヴェルシーニン　アレクサンドル・ヴェルシーニンと申します……

イリーナ　ええ、ヴェルシーニンさん、あなたがモスクワからいらっしゃるなんて。……ほんとに夢のようだわ！

オーリガ　ちょうどわたしたち、あちらへ住居を移そうと思っているところへね。

イリーナ　秋までには移ってしまうつもりですの。故郷の町、あたしたち、あそこで生まれたんですもの。……元バスマンナヤ街……（オーリガと声をあわせてうれしそうに笑う）

マーシャ　思いがけなく、同郷のかたにお目にかかれたわけね。（生き生きと）ああ、やっと思いだした！覚えてて、オーリャ、うちのみんなが、『恋の少佐』って言っていたじゃない？　あなたはあのころ中尉で、だれかに恋してらした。どういうわけだか、みんなであなたを、少佐少佐ってからかっていましたっけ。……

ヴェルシーニン　（笑う）　そう、そう。……恋の少佐、それですよ。

マーシャ　あの頃あなたは、口ひげだけでしたわ。……まあ、なんてお老けになって！（うるみ声で）なんてお老けになったの！

ヴェルシーニン　さよう、恋の少佐と呼ばれていたころは、わたしもまだ若くって、恋をしていました。今となっちゃ、いやもう。

オーリガ　でも、まだ一本も白髪が見えませんわ。お老けになったにしても、まだお年よりじゃないわ。

ヴェルシーニン　でももう、とって四十三ですよ。あなたがたは、モスクワを離れてよほどになりますか？

イリーナ　十一年になりますの。あら、どうしたのマーシャ、泣いたりして、おかしなひと。……（声をうるませて）あたしまで泣きたくなるわ……

マーシャ　なんでもないの。あなたは、どの街にお住まいでしたの？

ヴェルシーニン　元バスマンナヤ街です。

オーリガ　わたしたちも、そうでした……

ヴェルシーニン　ひところはドイツ街にもおりました。ドイツ街から、赤兵営（モスクワ東端にある兵営の名）へ通ったものです。その途中に、陰気な橋がありましてね、橋の下で水がざあざあいっています。孤独な身にとっては、へんにわびしくなる景色でしたよ。（間）それにひきかえ、ここの河はなんというひろびろした、豊かな河でしょう！　じつに、すばらしい河だ！

オーリガ　ええ、でもただ寒くてね。ここは寒くて、おまけに蚊がいますの。……

ヴェルシーニン　何をおっしゃる！　ここはじつに健康な、申しぶんのない、スラヴ的な気候じゃありませんか。森がある、河がある……おまけに、白樺もありますしね。なっかしい、つつましやかな白樺、――わたしは木のなかで、あれが一ばん好きです。住むにはいい土地ですね。ただ変なのは、鉄道の駅が二十キロも離れていることですね。……どうしてそうなってるのか、だれも知らんのです。

ソリョーヌィ　そのわけなら、ぼくが知ってますよ。（一同彼を眺める）なぜならばですな、もし駅が近ければ遠くはないはずだし、駅が遠ければ、つまり近くないというわけですよ。

白けた沈黙。

トゥーゼンバフ　ふざけた男だなあ、ええ、ソリョーヌィ君。

オーリガ　わたしも今やっと、あなたを思いだしました。覚えてますわ。

ヴェルシーニン　わたしは、お母さまをぞんじあげていました。

チェブトィキン　りっぱな婦人でした、天国にやすらいたまえ。

イリーナ　ママは、モスクワに埋葬しましたの。

オーリガ　新尼僧院（モスクワ西南端にある由緒の古い修道院。のちにチェーホフもここに葬られた）の墓地に……

マーシャ　どうしたことでしょう、わたしそろそろ、お母さんの顔を忘れかけているわ。わたしたちのことだって、そういつまで人は覚えちゃいないでしょうよ。忘れてしまうわ。

ヴェルシーニン　そう、忘れるでしょう。それがわれわれの運命である以上、どうにも仕方がありません。今われわれにとって、深刻で意味ぶかい、きわめて重大なことのように思われるものも、――その時がくれば、忘れられてしまうか、ささいなことに思われてくるでしょう。（間）そこで面白いのは、そもそも将来、何が高尚で重大なものと考えられ、何がちっぽけな笑うべきものと見なされるだろうか――そこのところが現在われわれには全く見当がつかないという点です。あのコペルニクスの発見、またたとえばコロンブスのそれは、はたして初めのうちは無用な笑うべきものと見えなかったでしょうか？　一方どこかの変わり者の書いた愚にもつかないたわ言が、かえって真理と思われはしなかったでしょうか？　そして現にわれわれが、こうしてばつを合わせている今の生活にしたっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb